

## 墮落

### 一心

その生活が一心でない時墮落という。  
学生が墮落したとは勉強に一心でなくなつたことである。

職業を持つた者が、自分の仕事に一心でない時に、墮落したという。  
墮落とは生活に「一心」でないことを意味する。

大無量寿経によれば

一心制意 一心に意を制し

端身正行 身を端し行を正しくして

独作諸善 独り諸の善を作す

とある。

一心であること、意を放縦にしないで、身をたゞし、行を正しうすることである。

一人の盲従から

親が嫁入りをすすめる。

娘はどうも気に入らぬ先である。

きつぱり拒絶することが出来ないで、親の權威に盲従する。

嫌々ながら嫁にゆく、

その出発が間違つている。

婚家で浮かぬ顔つきで、仕事も手につかない。

夫の生活が暗くなる。

やがて夫が家を外に遊びはじめる。

ついには借金が出来る。

親と子との間が面白くない。

こんな生活が墮落である。

### 自律

何故、君はあんなことの仲間になつたか。

「いや、私は初めから気がすまなかつたのですが、友人たちが無理にひきこむものですから、つい一緒にやりました。心からやつたことではないのです。」

何たる墮落ぞ。

しかも墮落を墮落だとも思わないところ、むしろ悲惨である。

大勢に押されて、自分の生くべき世界を生きてゆかぬ所に、墮落がある。

何ものにも奪われない、一心の生活者は彼自身の信じた世界に精進する。

道は必ず自律である。

はからい

「私は結婚していい具合にやろうと思つていましたのに、私故に家庭が真暗になりました。」

「わかつています。あなたはこうしたでしょう。姑には姑にあうようなあなたをつくり、夫にはただ夫の機嫌をとるためにやさしくし、義兄弟たちにも、それぞれあなたを変えて調子を合わすようにくく心配したでしょう。家内が五人おれば、五つ通り自分を使いわけ、十人おれば人数だけの人格の使いわけをやつたでしょう。」

「その通りをやつて来ました。」

「あなたは学校の先生までした方です。それが善だと考えましたか」

「そう考えて来ました。」

「それは道ではなくて、虚偽であり、はからいであります。」

「それが善ではないのですか。」

「常識的な社会では、それを善だと考えます。しかしそれは善でも道でもなくて、生活の墮落です。一人の男が、課長の前にはペコく頭をさげ、同僚には同僚で機嫌とりでニヤニヤし、下役には威張つていたら あなたはそれを正しい生活者として、夫に持つていきますか。」

世間では、お客の前だけに、頭をペコく下げて、お客が去つたら、ペろりと舌を出すような男、目的完成のためには、表面を幾通りにもぬりかえて通るような男を智者だ、やり手だとほめます。あなたはかゝる人を信用しますか。」

「もちろんそんな男は弱い男で嫌であります。」

「あなたの生活がそれであつたのです。」

「でも私は悪い意志でそんなことをしたのではないのです。」

「もちろん、あなたは悪い意志ではなかつたのです。しかし確信もなく、周囲にひきずられ、五重人格、七重人格を使う虚偽の生活であつたことはもちろんです。そのために、今のあなたの晴い生活が生れているではありませんか。」

周囲の人に殊更反逆するのも決してよいことではありません。しかし衷心に確信のない実行は、そのまゝ死んでいきます。」

昔ある国に孝子がいました。雨上りの日に父は下駄をはいて行けと言い、母は草履をはいて出よと言います。父に孝をすれば母に不孝になり、母に孝なれば父に不孝です。その孝子は、片足に下駄、片足に草履をはいて出て行つたといひます。もしその時、舅と姑とがいて、更に靴がいい、地下足袋がいいと言つたらどうします。下駄と草履と靴と地下足袋と手足四つんばいになつて出るやうです。

あなたの考えた善がそれだつたのです。動機が善でも悪でも、そのように一心でなくて、他にのみ引きずられてゆく生活を墮落だといひます。

あなたは墮落者だつたのです。

「私はまちがっていたのでしょうか。子供にだつて従順であるように、先生の言うことや親の命令に従えと教えて来ました。それはいけないことなのでしょうか。」

「それはある意味ではいいことです。しかしあなたが教えた子供たちに『何故孝行しますか』と問うて見ましよう。その時何と答えるか。それは世間が孝行人とほめてくれるから、知事さんから御褒美が貰えるから、教育勅語の中に書いてあるから、先生から教えられるから、修身の本に書いてあるから、親は慈悲深くて今日まで、善因善果・悪因悪果とて、育て、くれ愛してくれたから、善いことをすればよいことが報いるから、親が喜ぶから、名が残るから、品行が上になるから、さては先生や親が叱るから、以上のような答であるならばお気の毒ながら、あなたの訓育は根本から間違っています。」

功利的な世界に道はありません。世間や人を相手では、あくびの出る時がありません。中心の暗い者は、どこの世界をも暗くします。太陽が何時あなたのためといいました。お前のためといいました。何時ほめれば実行し、くさ、れたらやめました。一本の木があなたには梅の花を見せ、私には桜として咲き、更に桃と咲き、バラと咲くことが出来ますか。人間は一人で十人前をしたり、五通りに咲こうとするのです。」

「わかりました。私は全く小さなはからいによつて生きようと思いました。道だと思いつ、もそれで墮落でありました。子供の教育だつて大分まちがっていました。」

「道は道それ自身が道の目的であります。」

#### さびしき民衆

ソクラテスは毒杯をのみ、キリストは十字架に血を流し、法然・親鸞・日蓮は流罪にあう。誰が果して、彼ら聖者偉人に矢をむけ、毒杯をつきつけ、十字架を負わせ、流罪に処したか。今日の親鸞教徒の大部分が、親鸞聖人を敵にしたのだ。今日のキリスト教徒の大部分がキリストを金にかえるのだ。ああ、大衆よ。威勢のいいものをよいものと考え、世間の迷惑を真実よりも大切に思い、小さい社会的立場を真実よりも尊重し、まちがうついても長い間の因習を真実よりも重要視する。ああ、その民衆が古聖たちに血を流さしたのだ。一心ならざる生活の墮落者たちが。

#### 真実に強く

眠たい時には、眠いと言つたがいい。

眠つてく、眠くないまで眠つたがいい。

疲れた時には疲れたと言え。

そうして、疲れがなおるまで休んだがいい。

帰つてほしい時には帰つてくれと言え。

差し支えがある時には、差し支えがあると言え。

腹がすいたら、腹がすいたと言え。

嫌であつたら嫌だと言え、好きであつたら好きだと言え。

帰りたいかつたら帰つたがいい。

もういらないうのに、幾度も幾度も、もう一ばいもう少しとすゝめる者があ

帰るといふのに無理にとめる者がある。

腹がすいていても、今食つて来たという者がある。

帰つてほしくても帰つて下さいといひ得ない者がある。

お金がないのにないといひ得ず、知らないことを知らないといひ得ず、心にもない偽を言い、心にもない道を歩む。

悲しい時には泣いてく／＼泣きぬけ、可笑しい時には、笑つてく／＼笑いぬけ。

わからぬことはわかるまで問うて見よ。

意見があるなら、徹底するまで主張せよ。

自分の考えがまちがいとわかつたら、男らしく頭を下げよ。

真実でないならば形はどんなに美しくても、悪である。

青年よ

真実だと信じたなら、千万人が剣を向けようと笑つて行く男はいないか。

自らを捧げきつたら、最後の一枚の羽織までなげ出して、笑つて行く女はいないか。

お前が鼻むけもならぬほどの、浮身のやつししようをするのは大臣の椅子がほしいためか。

君が「お説はごもつともですが、どうも私には、その都合が、へい悪うございますので、そういう運動は立場のない青年がよかろうと存じます。」

聞かなくても結構です。

何たる墮落ぞ！

純一専心は薬である。

善悪雄心は毒である。

道ではなくて評判だ。

真実ではなくて、小さい村長という立場の保護だ。

無名の青年よ！

純一なる青年よ！

守らねばならぬ、かゝる重要な社会的地位を持たない青年よ！

我は限りなく君等の上に期待する。

兄等よ。年令は長じても、かかる若老・中老・早老となるなかれ

我らはかかる墮落者を老いたりという。

悲観すな

それだけの苦勞のために、自暴自棄になつて泣いているのか。

いや自暴自棄だと、それでもいつた男なのか。

商売で一千円損をしたとて、酒の世界に入りびたつて、五百円使つて、更に借金が出来て、信用がなくなつて、自暴の上ぬりをして、更に酒に三日入りびたつて、田を売つて……………。

おい目をさませ！ その心持ちには同情する。

しかしいつたいたいお金や身代が汝自身だと考えているのか。  
夫が死んで、子供が病気で、あなたが女工！  
悲観すな、それで斃れたら、たおれてもいい。  
斃れるなら斃れるまでやれ！

私は光明団をつゞけるためには一切を棄てた。家も売った、田も売った、捨身になつてやったことなら結果が悪くても悔いはない。

力一ぱいやつたことなら、死んだつて笑つて死なれるじゃないか。  
悲観すな、起て、笑つて起て、

弱い者が大嫌いだ。

善人らしい弱者は、悪人と同じことだー。

### 弱者

犬の遠吠え

それは弱者の象徴だ。

私は既成教団から随分と非難された。

曰く、異安心、曰く、教団の破壊者。

しかし今日まで私に面と向かつて言つた者は一人としていない。

会つた時には、「いや結構で、しつかりたのみます。」といい加減に言つておいて、少

し遠のくと悪罵する。

何という弱い人たちだ。

手をとつて導いてくれる人には、礼を厚うして教えを受ける。

面と向かつてほめて陰でそしる、それほど真人格を傷つける者はない。

我らはかかる墮落をつづけてはならない。

### 言いわけ

「それがその……行こうとは思つたのですが……ついお金に困りましたので……仕事が忙しいものですから……」

それは皆言いわけです。

もう聞かなくても結構です。

もしあなたの子供が大阪で汽車に引かれたとしたらあなたはどうしますか。

お金に困りましたので……

多忙でありましたので……

と言つていますか、

どんなにしても行くであろう。

自分の心以上の親切を売ろうとしないことである。

全ての言いわけは、自分を自分以上に売ろうとする心である。

口で言うよりも実行が大事

実行しなかつた部分を口で飾ることは墮落である。

心で思つたら思つただけのまことである。

全て言いわけは自身を持たない者のすることである。

ねたみ

墮落者は他をねたむ。

自ら精進するかわりに他をおとしいれようとする。

大無量寿経に曰く、

「奢縦して、おのおの意を快くせんと欲い、心に任せて自ら恣にし、かわるがわる相欺惑す。心口各異にして言念実なし。佞諂不忠にして言を巧にして諛い媚び、賢を嫉み善を謗りて、冤枉に陥し入る。」と。

自らは墮落した放縦我儘な生活をなして、快樂のみを求めて、相互に欺きあう。心と口とが違つていて、まことなく、ただ言葉上手にへつらいこびる。かかる人にかぎつて、賢い人を嫉み、善人をそしり、これをおとしいれることをはかるとの意である。

言を巧にして機嫌をとる。

努力しないで身分不相応な栄達を求めようとするのか、高く買ってもらいたいのか。

賢者をねたみ、善人をそしつてその声価を傷つけんとするに至つては、語るに足らぬ小人である。

何故の道草ぞ、

一心ならざる墮落者はかくして彼ら自らの墓穴を掘る。

金を持つて蘇られたら節操を売り、

地位を餌にされたら、人格を売る。

権力をもつておびやかされたら悪事へも味方をなし、

悪徳記者に名誉を奪うとおどされたら、あられもない狼狽をなし、

世間の評判を気にして、所信をまげる。

一心の生活者は無碍道をゆく。

剣も毒もその前を碍げ得ない。

弱者！

虚偽！

墮落！

聞いただけでも嫌である。

しかし我らはとかく真実の生活を忘れて墮落する。

確信

実行

その一心の正しい生活に不断の努力を払いつつ、真人格の光を輝かせねばならぬ。人必ずしも人ではない。

道は永遠に人である。

以て三尺の孤を托すべし

安らかに眠り、安らかに起きる。

桜花は二階の窓際に咲き、

名香は床の間にゆかしく薫る。

鳥のさえずる声が聞え、大工の槌の音が聞える。

彼方の山には杉の黒ずんだ林の間に雑木の芽が茶に黄に淡桃色に柔らににおう。

静かだ、厳肅だ、朝の一時、我今生きてあり、如来と共に。

幸というもなお及ばず、恵というもなおあまりがある。

人の心の温かさと、大自然の美しい光景とが私を幸福な静かな安らぎの中におく。

身にあまる恩恵、愛の負債を重ねてゆく、

報じてもくゝ報じきれぬ御恩の中に生きてゆく。

信じられるが故に、信じあうが故に、

信が人の心と心とを流れる時、そこにはじめて人生がある。

そうだ、信をおいて人生はありやうがない。

人を信じよ、人に信じられよ、

人の信を裏切る者、それが不真実であり、非人格である。

裏切られてもいい、裏切つてはならない。

こうした目で大地の真相に念いいたる。

自動車可部町を走る時である。

私ははがきをポストにおとしてと車掌にたのんだ。車掌は走る車の中からポストに同じく封書を入れようとすると女の手に、これをたのみますと突然に頼んだ。数秒の間にはがきは見も知らぬ女の手に渡された。

このはがきが果して目的地に達するか否か。

吉田町の八時の自動車に間にあうように七時には車が来ます。それが軍人分会長のお言葉であった。

六時半に起きて支度をして待つ。七時、七時半、八時になっても車が来ない。やむなく八時から一里の道を歩いた。八時の自動車には間にあわない。十時半の自動車しかない、広島に帰れば一時である。二時間半の時間を何でもないことに空費する。人力車をたのまれた人が、車に言うことを忘れていたのだそうだ。

多忙なる我らにとつては時間は金よりも尊い。一人の不注意が、二時間半の時間を空費さす。

父は斃れる。世つぎの男子は幼い。その子をいかなる人に托するか。

豊太閣は幼子秀頼を誰に托したか。

支那三国の世、漢の劉備は崩ずるに臨んで、その幼子禪を誰に托したか。

親類の間でさえ、本家の財産を主人の幼きにつけこんでとろうとする分家がある。

人心に信がおけない時、人の世界は狭苦しい。

人格とは何を意味するか。

猫の前には魚はおけない。人の前にお金はおけない。

広島に昭和博覧会が開かれる。「すりに御注意」の立札が現代文化のあるものを諷刺する。

油断して歩いていたら、懐中ものがなくなっている。

白昼すりを働くことが職業になる。

代議士に刃をむける七生義団とかの勇士が現われる。

帝都の唯中にピストル強盗が相ついで出て来る、これが現代文化の一面である。

おゝ人格、人格尊重への自覚、これを高調する必要はないのか。

親展という手紙がある。これを小人の前におく、針を一本持つて来てそつと上手に口をあけて、内容を見た上で封じておく。女子と小人の中にこれが多い。

私は人物試験の一つに、親展書に対する態度を見る。秘密を知ろうとするのは、小人特有の一つの性格である。親展書一つを托せない人物に、大きな問題や、公共団体・国家の運命を托し得るか。

明治維新、江戸征討の大軍がおしよせる。官軍の参謀西郷南洲と幕府の使者勝海舟との会見に、「よろしうござす、ひき受けました」の一言、江戸八百八町を兵火より救った。大西郷の人格がこゝにある。文字通り男子の一言金鉄の如しである。

実行されないなら、初めから頼みごとをわつたがいい。承諾しておいて実行せぬ、なぜ出来ませぬとことわらなかつたか。出来ないことはことわつたがいい。承諾した以上、命をかけて実行する。そこに人格生活がある。

教育者は、人の子をあずかる。安心して我が子の将来を托するのだ。

官吏が一国の政務をあづかる。会社員・銀行員・郵便局員、それぞれが人の金銭をあずかる。

社会は一大組織の上に動いてをり、生きておる。

托すること、托せられること、それが社会の組織である。

国家の法規を無視して、私益をむさぼる政治家、道路を食い、土地を食い、鉄道を食い、砂利を食う代議士、公金を遊興に使うた村の吏員、彼らは自らの人格を自ら破産し、国民の信に叛いたのである。

お金を貸したら、兄弟の間ですら証書を入れる。「お金については、親子でも他人」そうした言葉は嫌な言葉である。

「人を見たら盗賊と思え」誰がいったい造つた言葉か、銀行や郵便局にお金をあづける、通帖や受け取りのいらぬ社会。

お金を貸す、証書を出さないでも、いい社会、そんな社会は出来ないものか。



我らはまず信頼の出来る人になろう。

まかせきつてもいい人物、信用の出来る人物、社会生活の根底はこの信の人におかれる。

手紙一本托せられる人、やがて闊家もまかせ得る人である。